

FCT 創設 40 周年記念フォーラム
「多様化するメディア社会のメディア・リテラシー」
(2017 年 8 月 27 日、会場：早稲田大学)

基調講演「ネット社会の民主主義をどうつくるか」(要約)

荻上チキ (評論家/シノドス編集長)

ウェブ社会になって、多くの人たちが前提としている 90 年代までの「タテのメディア・リテラシー論」だけでは通用しない時代にきている。気をつける対象は、マスメディアや国家権力のプロパガンダとは違い、フォローしている友人やツイッター上の有名人であったりする。市民同士で現実認識が異なっていたり、フェイクニュースやデマの拡散があったりして、小さなパニックが日々起きている。ウェブ社会の力学を把握したうえで、日常的な情報コミュニケーションのなかでの「ヨコのメディア・リテラシー論」を考えていかななくてはならない。

ここでは態度の感染、ミメシス (模倣) の話をしたい。メディアに接触することで人々の態度や行為が変化する。小さい変化でも、ウェブ社会では集合させることによって大きな力に変わる。態度モデルとなる、影響力のある発信者が発信するネタへのリツイート、シェア、「いいね！」など瞬間的な行為が集積されることによって言論が構成され、モデルを模倣すること、ミメシスによってコミュニケーションが連続していく。

ネット上ではシニシズムの感染、特に社会的弱者への冷笑が目立つ。モデルを模倣して、嘲笑するという身振りが高尚な態度であって、メディアにだまされない人の振る舞いなんだという態度が学習される。たとえばこれまでの社会運動が試みてきた人権や再分配などの問題についての議論を嘲笑し無効化する。何かへのポジティブな運動というよりは、何かへの「アンチ」という行為で駆動するクラスタがネット上にはそれなりにいて、そのほうが瞬間的に多くの人を動員しやすく、行為体としての規模を拡大できる。シニシズム的な態度に感染した人々の無意識の行動が、結果として民主主義的なもの、ジャーナリズム的なものに対するアンチという行為で思想を形づくってしまう。この世の複雑な真実を圧縮してくれたような感じを味わえる、140 字の端的でシンプルな説明が拡散され、議論の深さを阻害するため、ある種の政治運動というものが言論としてネット上に普及しにくいという状況を生みえる。

そうなったときに今までのリテラシー論のように、従来のマスメディアの報道のかたちを変えることによって私たちのコミュニケーションをベターなものにしていきましょうというのは難しい。むしろ隣の市民、ヨコの市民同士がウェブ上で日常的におこなっている態度や行為、オピニオンリーダーの発言の拡散に対してどのように抵抗していくかが問われている。サイバースケード、滝のような情報の一方向の流れに対して、そうではないというファクトをしっかりと提示することが必要で、同時にそこではクールさ、かっこよさも重要となる。

どうしたら全体的にリテラシーを身につけられるかという答えは出ない。それぞれがシングルイシューのセミプロとして、諸分野で個別のリテラシーを発揮しながら対抗スケードをつくりあげていくことが必要となる。実はデマを流す人たちもまた同じように考えているが、ネット上で様々な言論を是正していく市民運動が常に求められている。

(文責：FCT)

パネルディスカッション 「多様化するメディア社会のメディア・リテラシー」(概要)

報告者： 荻上チキ (評論家／シノドス編集長)

野口由紀 (毎日新聞記者)

森本洋介 (弘前大学／FCT 理事)

司会： 高橋恭子 (早稲田大学／FCT 理事)

荻上氏の基調講演後、休憩を挟んでパネルディスカッションが行われた。まずパネリストの野口氏、森本氏から自己紹介を兼ねて「私とメディア・リテラシー」というテーマで、自身とメディア・リテラシーの出会いやメディア・リテラシーについての持論を展開した。

次にネット社会のメディア・リテラシーについて、パネリストの専門としている現場でどういう状況にあるかの認識について森本氏と野口氏からコメントがあった。教育での問題について森本氏から学習指導要領上の問題や教師の多忙さ、どちらかといえば情報モラルや ICT 教育に流れがちな学校現場の状況についてコメントがあった。また野口氏からは紙の新聞とネットでの自社サイトの記事について購読料の観点からの説明や、現在ではネット上でのニュース配信を念頭において新聞記者も動画を撮影する場合があることや、ネットのニュースも視野に入れて記事を作成するといったことなどが報告された。このようにネットメディアの登場によって既存の活字メディアも変化を迫られている状況が示された。

続いて司会からネット時代の子どものメディア環境について森本氏にコメントが求められた。森本氏からは全国の小学生の半数以上 (高学年になるほど割合が増加) がケータイを持ち、高校生ではほぼ 100%がケータイを所有する現代の学校において、ネットいじめの状況や大人も含めてのコミュニケーションの変化についてコメントがあった。また、どのように教育においてメディア・リテラシーのクリティカルな能力を育成するののかについても言及があった。さらに司会から荻上氏に対して、基調講演で話題にされたファクト (事実) の提出の仕方について具体的に説明が求められ、荻上氏は多様な事実 (もしくは事実とされているもの) についてユーザーがそれぞれの専門知についてのリテラシーを醸成し、それを集団で持ち寄って対抗のサイトをつくることによって、偽の事実が淘汰されるはずだということ述べた。

次に司会から、メディア環境の変化とメディア・リテラシーの変化について森本氏に認識を聞いた。森本氏はネットメディアの登場によってメディア・リテラシーにも変化が必要だとする議論を紹介したうえで、これまでも新聞やテレビといった「ニューメディア」が登場するたびにコミュニケーションの変化は起こってきたが、メディア・リテラシーにおける「クリティカル」の意味が変わることはなかったのではないかと説明した。

ここで話題がジャーナリズムの方に移り、日本におけるネットならではのジャーナリズム、市民とマスコミが協働したジャーナリズムについて野口氏から、一般市民を交えた記事はあまりないが、読者の声を紹介したり外部の有識者の意見を入れたりする動きはあることが紹介された。荻上氏からは読者を育てていくような記事を、記者がメディア・リテラシーの視点を持って書いていくことが重要だとする意見があった。

最後のテーマとして、ネット時代において市民がいかにしてメディア・リテラシーを獲得していく

か、市民と協働していくかについて、それぞれの立場から持論が展開された。森本はネット時代において子どもの情報量が格段に増えた一方で、それを評価するための専門知が不足しており、また学校の教師だけではその知をカバーできないことから、NPO や地域住民と学校の協働が必要だと述べた。野口氏はネット時代になって各メディアの報じ方を比較することが容易になったことを挙げ、そのような環境のなかで事実に基づいた情報の提示がますます必要であり、それによって市民がデモクラシーを実現できると述べた。荻上氏はマスコミが研究者とともに記事をつくりあげることが必要であること、その話題の当事者が記事作成に関わること、ネットのメディアチェックを市民が丁寧に行うこと、その際に専門知を持つ人間がコミットすることを挙げた。

フロアからの質問では、荻上氏に対して情報を発信する人間の意図についての認識に関する質問があり、荻上氏はもともと流言に関する研究が自分の出発点であり、ネットの情報が何を生み出しているかに自分の関心があると答えた。次に野口氏に対してネットニュースの有料記事と無料記事がユーザーの閲覧傾向に及ぼす影響についての質問があった。野口氏はこの点に関しては具体的なデータがないと答えた。また荻上氏に対してシノドス運営方針についての質問があった。荻上氏はシノドスの記事は基本的にタイムリーな出来事について執筆依頼を行っているが、後で何かそのテーマに関する出来事が起こったときに再読されるというシノドスの閲覧傾向があると説明した。またシノドスは長文の記事であるが、それを読んでくれる人にメッセージが届けばよく、専任のスタッフを養えるだけの寄付が集められればよいとする考えを述べた。荻上氏と野口氏に対してリベラルメディアに対する批判に関する質問、紙で新聞を読むことに対する認識に関する質問があった。まず荻上氏は紙のメディアの方が読み比べには適しているが、ラジオ番組でリスナーと情報を共有する際はネットメディアの方がやりやすいと答えた。またリベラルメディアへの批判に対しては、大手メディアが豊富な資金力を使ってしかるべき対応をしてほしいということ、いわれなき中傷に対しては個別の記事で丁寧に応答することをコメントした。野口氏は政治や経済など多様な情報が1つのパッケージとして提供されていること、そしてそれが読み比べできることに新聞の意義があるのではないかと述べた。また新聞記者としては今自分たちがやっていることをきちんと行うこと、つまりきちんとした取材にもとづいて事実を伝えていくことがそういった批判に対して必要な応答ではないかと述べた。

(文責：森本洋介)